様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １８ 日現在

機関番号：３４３１５
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０７７９

研究課題名（和文）異宗教の相剋により生じた社会現象の比較史的研究―古代仏教説話に見る伝統と革新

研究課題名（英文）Comparative historical study of social phenomenon that raised from interrelious rivalry -traditions and revolutions on ancient Buddhism

研究代表者
本郷　真紹（Hongo, Masatsugu）

立命館大学・文学部・教授

研究者番号：７０２０２３０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,100,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究では、神祇信仰と仏教の融合（神仏習合）のあり方を検討することから、日本古代社会の宗教的特質を解明することを目的とした。従来の古代仏教史研究の成果と課題を踏まえ、（１）日本古代社会における国家の仏教政策と民衆・地域社会レベルでの仏教受容との関係性、（２）在来信仰たる神祇信仰と仏教の相剋、その結果としての神仏習合の実態と意義、（３）東アジア史的な視角からの仏教受容史の比較史的研究という分析視角から、日本最古の仏教説話集『日本霊異記』収録説話に検討を加え、仏教思想の伝播が古代社会に与えた影響とその歴史的意義の解明を目指した。成果は『考証 日本霊異記 上』として刊行した。

研究成果の概要（英文）：In this research, through the consideration of syncretism of kami and buddhas, it was intended to clarify the religious essence in ancient Japanese society. Our research based on the achievements and challenges of traditional ancient Buddhism history in Japan, and We have three analysis points; (1) The relationship with the Buddhism acceptance of the national Buddhism policy and the people or local community level in ancient Japanese society, (2) Jingi belief and Buddhism of rivalry, reality and significance of the results as of syncretism of kami and buddhas, (3) Compare with the Acceptance of Buddhism at ancient East Asia.
On these historical viewing angles, we study on the oldest Buddhism narrative collection "NIHON RYOIKI" in Japan, and we discuss that Buddhism thought propagation is aimed at elucidation of its historical significance impact of the ancient society. Achievement it was published as "historical research on NIHON RYOIKI".

研究分野：日本古代の律令国家・王権と仏教

キーワード：日本古代史　宗教史　神仏習合　日本霊異記　日本古代社会

１．研究開始当初の背景

律令制下における仏教には、従来「国家仏教」という性格規定が与えられてきた。奈良時代の国家仏教体制下では「国家鎮護」の利益が最優先とされ、仏教による民衆の救済が説かれることになるのは、鎌倉時代以降というのが従来の仏教史研究のシェーマであった。しかし近年、律令制下における貴族や民衆の信仰に注目がなされるようになり、特に、出土文字史料の増加や地方寺院の考古学的研究の進展によって、地域社会における民衆仏教の実態が徐々に明らかになってきた。こうした観点からは、国家仏教という性格規定には既に有効性がないとされがちである。

しかし 6 世紀の仏教伝来以降、特に孝徳朝以後、王権が主体となり仏教の導入と興隆を図ってきたことは明らかであり、少なくとも律令制下における仏教を「国家仏教」と称することには意味がある。この時代、僧尼の生産と統制が国家の独占的管理下に置かれたこと、更に経典の製作も国家の主導下で行われたことは、その具体的指標といえよう。

ところで、近年の古代仏教史研究においては、古代東アジア地域における国家形成史と仏教導入の関係を明らかにする研究成果が蓄積されている。これら東アジア史的視点から日本古代仏教史を捉える視角は、たいへん斬新であるが、古代の地域社会や民衆的基層において受容された仏教が、どのように当該期の中国・朝鮮などの仏教と相異するのか、といった比較史的検討はなされていない。

例えば、古代の仏教説話である『日本霊異記』において、中国の説話からの翻案が多数見られることは既に多くの研究に指摘がある。問題は、中国の民衆社会に即した説話が、翻案されているとはいえ、日本の民衆に向けた教説・唱導において有効性があると当該期の僧尼に認識されていたこと、すなわち日本古代社会においてそれほど障害なく受容される基盤があったと見られる点である。これは当該期の日本社会における仏教導入のレベルを測定する上で重要な問題である。

２．研究の目的

以上の研究動向を背景とし、本研究においては、古代国家の仏教政策と、民衆・地域社会レベルで受容されていた仏教との関係性、更には民衆の在来信仰と仏教の相剋の実態の解明を目指すことを目標に据えた。

そして、日本古代社会における伝統的価値観・信仰と、外来宗教である仏教的な価値観・信仰について、特に神祇信仰と仏教との融合（神仏習合現象）を中心に考察し、仏教思想の伝播が社会に与えた影響を明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では、前記研究目的に応える素材（史料）として、平安時代初期に編纂された仏教説話集『日本霊異記』を取り上げ、前科研費採択課題を発展的に継承して、霊異記説話に見られる仏教受容のあり方、固有・在来信仰との交渉の実態等を具体的に考証していくこととした。

そして、霊異記説話を考証する際、『扶桑略記』『今昔物語集』『三宝絵』『法華験記』等に継承された諸説話の比較を行い、古代社会における僧尼や寺院の位置、あるいは仏教受容のあり方の変遷を検討した。また、霊異記説話の原点となった中国における同種の文献（『冥報記』『高僧伝』など）や引用された経典との比較を通じて、日本古代社会における伝統的価値観・信仰が、どのような形で仏教的価値観・信仰に影響されたかを考えた。

この他、神祇信仰と仏教の融合のあり方がうかがえる奈良・平安期の寺院や遺跡などでフィールドワークを行い、研究課題への理解を深めようとした。

４．研究成果

研究期間の 3 年間を通じ以下のような調査・研究を行った。

(1)『日本霊異記』上巻の注釈書の刊行

研究期間最終年度末の 2015 年 3 月、法蔵館より『考証 日本霊異記 上』（本郷真紹 監修・山本崇 編集）を刊行することができた。

本書は、日本霊異記上巻の序と第 1 縁から第 35 縁までの注釈書である。研究代表者・本郷は、本書の序文と解説を執筆し、全体を監修した。研究分担者の山本は、全体の編集にあたるとともに、凡例・書誌・後書を執筆した。序文と第 1 縁から第 35 縁の注釈は、最古の写本である興福寺本を忠実に翻刻した「原文」、興福寺本と諸写本・群書類従本との詳細な異同を明らかにした「校異」、古訓・訓釈などをふまえた「書き下し文」、日本古代史学・考古学・歴史地理学・仏教史学・仏教学等の観点から執筆するとともに、必要に応じて定評のある事典などを利用し出典も明示して施した「語釈」、説話の理解を助ける「現代語訳」、今昔物語集など後世の説話集に継承された説話本文を掲げた「関連説話」、説話を理解する上で必要なトピックを、日本古代史などの最新の研究成果をふまえて執筆した「補説」、説話毎に関連する文献史料を掲げた「参考史料」、さらに「参考文献」「関連地図」といった項目からなる。こちらは、本郷・山本と研究分担者の毛利、研究協力者の藤田琢司、吉岡直人、駒井匠の 6 名で執筆を分担した。

研究期間の最後の 2 年間は、本書刊行のために執筆者（分担者・協力者ほか）で、校正を含め多数の検討作業の機会を持ったほか、研究代表者の勤務先の大学院生に依頼して、校正等の作業を行った。

(2)『日本霊異記』中・下巻の検討

前科研採択課題のもとでの研究を引継ぎ、『日本霊異記』中巻 27 縁以降、下巻 22 縁ま

での逐次検討を行った。研究期間中にほぼ月１回、全 26 回の定例研究会を立命館大学朱雀キャンパスで開催した（研究代表者・分担者 2 名・協力者 4 名が参加）。この研究会では、各縁担当者が、底本とする真福寺本の写真版及び対校本（来迎院本・前田家本・国会図書館本・群書類従本）の写真版を用いて本文を校合し、古代史・仏教史・歴史地理学的な視角よりする注釈を付した報告を行い、研究会メンバーで討議を行った。この間、A4 版約 300 枚の注釈書元原稿を蓄積した。

中下巻の霊異記説話は、奈良時代中期以降が対象の時代となり、「神仏習合」や「民衆仏教」の実態をうかがわせる内容が少なくない。研究会での説話の詳細な検討を通して、研究課題についての理解を深めることができた。その研究成果は、個別の研究論文の他、今後予定している『考証 日本霊異記 中』『考証 日本霊異記 下』で公表していきたい。

また中下巻の検討に際しては、関連文献の写本調査を行った。2012 年 8 月には、名古屋大学附属図書館を訪ね、同館が所蔵する小林文庫本「因縁集」の近世写本を実見した。この写本には霊異記関連説話が収められているが、小林文庫本以外の写本は存在せず、また刊本も存在しない。写真版では疑問の残る個所があったため、その確認も含めて、名古屋大学附属図書館にて調査を行ったものである。翻刻上の疑義を確かめ、文字を確定できたほか、翻刻の際の手続き等についても所蔵先担当者から説明を受けることができた。

また 2012 年 12 月には、霊異記中下巻の底本としている真福寺所蔵本『日本霊異記』の新たな断簡（下巻序の一部）が発見されたとの報を耳にし、それが名古屋市博物館で開催中の特別展「大須観音展」に出陳されていたので見学に訪れた。下巻序は、真福寺本では後半のみしか残存しておらず、前半が不明であった。20 世紀になって発見された前田本と来迎院本からほぼその全貌が判明したものの、真福寺本の残存部分とはうまく対応しない。文脈にも疑点を残すところが少なくなく、多くの問題をはらむテキストであった。しかし鎌倉期の善本である真福寺本の断簡が新たに発見されたことは、霊異記の注釈史に進展をもたらすものといえる。

（3）フィールドワーク・現地調査

本研究では、神祇信仰と仏教との融合のあり方が窺える奈良・平安期の寺院や遺跡などを豊かに含む地域へのフィールドワークを行い研究の幅を広げることを計画し、2 回のフィールドワークを行った。

2012 年度は、大分県の古社寺を踏査した。大分県には豊後地方を中心に磨崖仏など仏教信仰に由来する石造物が日本で最も多く残存しており、また神仏習合の起点となった宇佐八幡（宇佐神宮）や、中央との文化的交流を豊かに伝える六郷満山の諸寺が所在している。2 日間の旅程の 1 日目は、臼杵市の臼杵磨崖仏を訪ねた。当地では磨崖仏の立地などについて、中国唐代の石窟寺院などとの比較検討ができた。また豊後国国分寺とその遺跡に立地する大分市歴史資料館では、伽藍の遺構を確認するとともに出土遺物などを実見した。2 日目は、宇佐八幡とその神宮寺であった弥勒寺遺跡を訪ね、大分県立歴史博物館では、多くの史料や復元文化財を見ることで当地の仏教信仰や神仏習合的状況について理解を深めることができた。六郷満山の冨貴寺、長安寺、天念寺、両子寺も訪ね、住職から話を聞き、仏教文化財を拝観した。現在も神仏習合的な様相を色濃く残す六郷満山については、十分な比較宗教史的な検討はなされておらず、現存する文化財・遺構に即した検討を進める必要性を痛感した。

2013 年度は、富山県の立山博物館と、県内の古代遺跡を踏査した。立山博物館では、学芸課長の城岡朋弘氏と学芸員の加藤基樹氏の案内で、所蔵品である平安期以来の立山信仰にかかわる遺物・彫刻・文書などを見学した。また博物館の所在する立山市芦峅寺の旧宿坊や聖域との境に設けられた閻魔堂、布橋、姥堂跡を見学した。この他、1 日目は、古代荘園図の故地である舟橋村の稚子塚古墳などを訪ねた。2 日目は、県東部・入善町の国史跡じょうべのま遺跡（古代荘園図の故地）、上市町の大岩山日石寺（平安期の磨崖石仏がある）などを訪ねた。

また霊異記説話の検討に関わり、比蘇寺跡、雷岡、元興寺、大安寺、葛城、太子道、壺阪寺など故地周辺地域の踏査を行い、歴史的地理的環境の把握に努めた。

（4）総括

研究期間の最後に『考証 日本霊異記 上』を刊行した。本研究の研究成果は、本書のなかに盛り込まれているが、その執筆及び霊異記中下巻の注釈作業を通して得られた古代仏教および古代社会に関わる新たな知見は、研究代表者・分担者・協力者それぞれが発表した個別の研究にも生かされている（「５．主な発表論文」参照）。『考証 日本霊異記』に関しては、中下巻の刊行が今後の大きな課題である。注釈作業は、研究期間中に下巻の半ばまで終了しており、最終年度には、中巻刊行の準備も少し進めることができた。今後、早期に編集作業を進め、研究成果を公表できる様にしたいと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 20 件）

［１］本郷真紹(単著)「古代寺院と学僧」、根本誠二他編『奈良平安時代の〈知〉の相関』、岩田書院、2015、27-60 頁、査読無

［２］吉岡直人（単著）「大宰府西海道支配と対外関係」、『日本史研究』631 号、2015、1-26 頁、査読有

［３］駒井匠（単著）「宇多法皇考」、根本誠二編『奈良平安時代の〈知〉の相関』、岩田

書院、2015、287-318 頁、査読無
［4］山本崇・高尾浩司・藤井裕之(共著)「鳥取県良田平田遺跡の出土文字資料」、『奈良文化財研究所紀要 2014』、2014、52-53 頁、査読無
［5］毛利憲一「2014 年度歴史学研究会大会報告批判 古代史部会」、『歴史学研究』926 号、2014、46-47 頁、査読有
［6］駒井匠（単著）「天皇の受灌頂と皇帝の受灌頂」佐藤文子他編『仏教がつなぐアジア』、勉誠出版、2014、87-106 頁、査読無
［7］山本崇（単著）「一九七七年以前出土の木簡(三五)奈良・今井町環濠」、『木簡研究』35 号、2013、138-135 頁、査読無
［8］山本崇（単著）「近年の木簡調査研究の動向」、『考古学ジャーナル』649 号、2013、13 頁、査読無
［9］山本崇・高僑透(共著)「右京七条一坊・朱雀大路の調査－第 168、査読無、9 次」、『奈良文化財研究所紀要 2013』、2013、106-107 頁、査読無
［10］山本崇（単著）「本誌未掲載出土事例略報(二)新潟・小木城 1(館跡)」、『木簡研究』、35 号、2013、156 頁、査読無
［11］山本崇（単著）「書評 高島英之著『出土文字資料と古代の東国』」、『日本歴史』787 号、2013、107-109 頁、査読有
［12］山本崇（単著）「オシテフミ考―大宝令制以前の文書について」、『文化財論叢Ⅳ』（奈良文化財研究所創立 60 周年記念論文集、奈良文化財研究所学報第 92 冊）、2012、425-442 頁、査読無
［13］山本崇・藤井裕之（共著）「藤原宮木簡の樹種」、『奈良文化財研究所紀要 2012』、2012、117-118 頁、査読無
［14］木村理恵・山本崇（共著）「二〇一一年出土の木簡　奈良・藤原京跡」、『木簡研究』34 号、2012、14-15 頁、査読無
［15］山本崇（単著）「一九七七年以前出土の木簡（三四）　奈良・藤原宮跡」、『木簡研究』34 号、2012、118-119 頁、査読無
［16］高橋学・五十嵐祐介・山本崇（共著）「一九七七年以前出土の木簡（三四）秋田・小谷地遺跡」、『木簡研究』34 号、2012、123-124 頁、査読無
［17］山本崇（単著）「本誌未掲載出土事例略報（一）石川・普正寺遺跡(1)」、『木簡研究』34 号、2012、130 頁、査読無
［18］山本崇（単著）「本誌未掲載出土事例略報（一）石川・普正寺遺跡(2)」、『木簡研究』34 号、2012、130 頁、査読無
［19］山本崇（単著）「本誌未掲載出土事例（一）新潟・平林城跡」、『木簡研究』34 号、2012、131 頁、査読無
［20］山本崇（単著）「本誌未掲載出土事例略報（一）新潟・牧目館跡」『木簡研究』34 号、2012、131 頁、査読無

〔学会発表〕（計 9 件）
［1］山本崇（単独）「その後の藤原京－藤原宮京の退顛過程」、第 9 回都城制研究集会 1 古代都城のその後と古都へのまなざし、2015 年 02 月 11 日、奈良女子大学（奈良県奈良市）
［2］山本崇（単独）「2014 年全国出土の木簡」、木簡学会第 36 回研究集会、2014 年 12 月 6 日、奈良文化財研究所（奈良県奈良市）
［3］吉岡直人（単独）「大宰府西海道支配と対外関係」、2014 年度日本史研究会大会、2014 年 10 月 12 日、佛教大学（京都府京都市）
［4］山本崇（単独）「因幡・伯嘗の古代木簡」、島根県古代文化センターンンポジウム 1 よみがえる古代からのメッセージ～木簡が語る古代仕会の実像、2014 年 9 月 8 日、大社文化プレイスうらら館（島根県出雲市）
［5］山本崇（単独）「2013 年全国出土の木簡」、木簡学会第 35 回研究集会、2013 年 12 月 8 日、奈良文化財研究所（奈良県奈良市）
［6］山本崇（単独）「木簡を広げる－古代以外の、さまざまな地域の木簡」、奈良文化財研究所東京講演会 1 歴史の証人木簡を究める、2013 年 09 月 22 日、有楽町朝日ホール（東京都千代田区）
［7］吉岡直人（単独）「武井紀子報告「日本古代地方支配における“官”と私」に対するコメント」、若手アジア史論壇（招待講演）、2013 年 3 月 9 日、早稲田大学（東京都新宿区）
［8］毛利憲一（単独）「倭王権と部民制―研究史と課題の整理―」、日本史研究会古代史部会、2012 年 9 月 17 日、日本史研究会（京都府京都市）
［9］山本崇（単独）「古代宮廷の宴―木簡が語る食材」、奈良の食文化研究会（招待講演）、2012 年 5 月 20 日、奈良市生涯学習センター（奈良県奈良市）

〔図書〕（計 5 件）
［1］本郷真紹(監修)、山本崇(編集)『考証日本霊異記 上』、法蔵館、2015、430 頁
［2］山本崇(責任編集)、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター（編集）『埋蔵文化財ニュース第 154 号全国木簡出土遺跡・報告書綜覧Ⅱ』、奈良文化財研究所、2014、208 頁
［3］山本崇（分担執筆）『飛鳥藤原京への道』（飛鳥資料館図録第 59 冊）、奈良文化財研究所、2013、58 頁(担当 17-22 頁)
［4］山本崇(分担執筆・イラスト監修解説)『週刊朝日百科 新発見！日本の歴史 12 号女帝と怪僧』、朝日新聞出版、2013、39 頁(担当 8-9 頁)
［5］山本崇(責任編集)、奈良文化財研究所都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）史料研究室（編集）「埋もれた大宮人の横顔―藤原宮東面北門周辺の木簡」リーフレット、奈良文化財研究所、2012、6 頁

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）
○取得状況（計０件）

〔その他〕

なし

６．研究組織
(1)研究代表者
本郷　真紹（MASATSUGU HONGOU）
立命館大学・文学部・教授
研究者番号：７０２０２３０６

(2)研究分担者
山本　崇（TAKASHI YAMAMOTO）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財
研究所・都城発掘調査部・主任研究員
研究者番号：００３５９４４９

毛利　憲一（KENICHI MOURI）
平安女学院大学・国際観光学部・准教授
研究者番号００４２５０２６

(3)研究協力者
藤田　琢司（TAKUJI FUJITA）
吉岡　直人（NAOTO YOSHIOKA）
駒井　匠（TAKUMI KOMAI）